

文化現象としての trah

宮崎 恒二,* 宮崎 寿子**

The Javanese Trah: A Cultural Phenomenon

Koji MIYAZAKI* and Toshiko MIYAZAKI**

The *trah*, a type of Javanese genealogical organization focussed on an apical ancestor, received little attention until Sjafrî Sairin's recent study. The present article introduces the main points of his explorative research and attempts to re-interpret and discuss this cultural phenomenon in a wider scope. Although Sjafrî's sociological interpretation of the post-1965 development of *trah* is persuasive, his explanation of the Javanese cultural background, in which he refers to Javanese cultural norms such as harmony, mutual

aid, and tranquillity, is insufficient to explain the diffusion of *trah*. Having originated from royalty and spread to the common people, *trah* can be considered to be a mimesis of royal culture. The Javanese royal court stressed its roles as center of the cosmos and as cultural exemplar. The cultural elements contained in *trah*, however, are also observable in non-royal, folk customs, though in rudimentary forms. From this point of view, *trah* can be interpreted as a long-term cultural development in the Javanese kingdom.

I はじめに

ジャワ社会に関する研究の中で、これまであまり触れられなかった現象の一つに *trah* がある。*Trah* とは、ある特定の祖先を共有する人々の集団である。これまで看過されてきた主な理由は、*trah* が典型的なジャワ社会の要素とはみなされなかったことにあると思われる。一般に、ジャワ社会の典型的イメージは、農村社会によって代表されることが多

い。そして「双系的」で祖先志向がみられないとされている農村社会では、事実、*trah* が観察されることはなかったといってもよい。*Trah* がみられるとしても、それは王族の間に限定されていることから、王族の構成する宮廷という「特殊な」社会の文化要素は、ジャワ社会全体を代表するものではない、と考えられてきたとみてもよいであろう。

しかし、ここで *trah* をとりあげるのは、現在、*trah* が宮廷社会のみならず、宮廷の壁を乗り越えて、一般の人々の間にもみられるからである。筆者の知りうる範囲でも、¹⁾

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所; Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4-51, Nishigahara, Kita-ku, Tokyo 114, Japan

** 早稲田大学国際部; International Division, Waseda University, 1-6-1 Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo 160, Japan

1) 筆者は1981年4月から1983年2月までの期間、ヨグヤカルタ市内およびスレマン県内の農村に滞在し、調査・研究に従事した。なお、研究テーマは「ジャワにおける伝統的知識体系の研究」(宮崎恒二)および「日本とジャワの農村における女性のコミュニケーション」。

ヨグヤカルタ市内の住宅密集地 (kampung) だけでなく、ヨグヤカルタ特別区スレマン県の農村においても trah が存在していた。²⁾ また、後者においては、trah の設立を計画している住民もみられた。

後述の Sjafrî の指摘するように、trah は一般人の間に広がりつつあるように見える。この広がりもしくは浸透が、今後とも連続すると仮定すれば、trah はジャワ社会の重要な要素として認知され、ジャワにおける親族の記述も塗り替えられることになる。Trah の広がり「地縁」結合に代わる「血縁イデオロギー」の浸透とも考えられるからである。

Trah のような宮廷文化の宮廷外への浸透は、広い意味ではジャワにおける都市化の現象に属する。特に、かつて王都であり、現在でも宮廷が文化的影響力を保っているヨグヤカルタにおいては、都市的な文化は、少なくとも部分的には宮廷文化と重なるからである。

本稿では、以下において trah の概観を行い、trah の広がり背景を探る。これまで trah について触れたものは非常に少ない。唯一 Sjafrî [1982] が、やや詳しく記述しているが、調査方法に由来する制約から、十分な資料とはいえない。しかし、現在のところ、ほかに資料がないことから、本稿では、敢えてこの Sjafrî [ibid.] の概観を基本として、trah

という現象をどのように解釈すべきかという点を中心に探っていきたい。

II ジャワの trah: Sjafrî の調査

調査方法

Sjafrî 本人はジャワ人ではなく、ミナンカバウ人であるが、彼の妻がジャワ人で彼自身が妻の属する Trah Cakradiryan の会合に1976年と1977年に参加することにより、trah に興味をもち、研究を始めたようである。³⁾

まず、1977年の11月に trah に関する情報を集めるため、*Kompas*(ジャカルタ)、*Kedaulatan Rakyat* (ヨグヤカルタ)、*Suara Merdeka* (スマラン)、*Surabaya Post* (スラバヤ) の四つの新聞に trah についての情報を求める広告を掲載し、その回答に基づいてアンケート調査を実施した。⁴⁾ その結果、最終的に得られた19の trah についてのデータのみを基礎

3) Sjafrî の調査はオーストラリア国立大学の修士論文のために行われた調査で、trah を最初にとりあげた予備調査的なものである。修士論文の題名は、"Javanese Trah: A Preliminary Description of a Type of a Javanese Social Organization" [Sjafrî 1980] となっている。Sjafrî [1982] は、この修士論文とほぼ同一の内容である。

4) 「Trah についての研究をしているので、その活動に参加している人、もしくは、何か知識のある人は情報を提供するか、こちらに連絡してほしい」旨の新聞広告を掲載した。その反響として8通の手紙と二つの直接の連絡があった。これらの情報をもとに、10個の質問項目 (trah の名称、創設年月日、目的、活動など) からなる簡単なアンケートを作成し、それを再び、応答があった新聞の読者とヨグヤカルタの知人の間に23通を配布し、回収できたのは18通であった。重複を除くと、確定できた trah は16であった。その後、Sjafrî 自身が知人を通じてインフォーマルに情報収集し、1980年までに全部で47の trah の存在を確認した。しかし、このうち28は正式名称が確定できただけで、残り19の trah についてのみ、設立時期や目的、活動についての情報を得た。

パタンの比較研究」(宮崎寿子)であった。前者は昭和55年度文部省アジア諸国等派遣留学奨学生として留学中の研究テーマであり、後者の研究はガジャ・マダ大学農村地域研究所の研究プロジェクトで、国際交流基金の研究費補助を受けたものである。これらの調査は、いずれも trah には直接関係のないものであり、ジャワ滞在中に得た筆者自身の trah に関する知見は、これらの調査の過程で得られた断片的な情報であることを、あらかじめ断っておく。

2) いずれも祖先は王族であるが、trah の成員は、その祖先の7-10世代下の子孫であり、王族の称号をもたない商人や農民を含む。

として、調査結果を分析している。このような簡単なアンケートと Sjafri 自身のインフォーマル・トークに基づく調査データは、極めて不十分なものであり、今後本格的な実態調査が不可欠なことは、本人も認めているところである。

Trah の語源

現代ジャワ語においては trah は treh とともに子孫 (afstammeling), descent, lineage などの意味をもっている [Horne 1974; Pigeaud 1938]。たとえば、“trah-tumerah”は“～一族”を示し、“AはBの子孫である”といった表現にも trah という動詞が用いられる。しかし、古代ジャワ語にはこの trah に相当する語彙はみあたらない。これについて Sjafri は、Soewito Santoso の説を引き、trah は古代ジャワ語の truh から由来したものではないかとしている。Truh というのは“雨”という意味で、雨は空から大地へと下降する。同様に trah も祖先から子孫へと下降する。また、trah は“血”に truh は“水”に深い関連をもち、“血”と“水”の概念はともにジャワ人にとっては、“rembes” (しみ出す) という概念と密接な繋がりをもっている。このような概念的関連性に加えて、言語学的にもジャワ語においては、“u→a”という母音変換が頻繁に起こることから、truh が trah の語源ではないかと論じている [Sjafri 1982: 3]。しかし、trah には treh という同義語もあり、語源についてはより詳しい調査が必要であろう。また、現代インドネシア語においても trah は“anjing trah” (血統書つきの輸入種の犬) という表現に用いられているというが [loc. cit.]、この種の犬が、上層の都市住民のペットであることから、むしろ、後述の社会組織として trah を意識した用語法であるといえよう。

中部ジャワ、特にヨグヤカルタ、スラカル

タ地方では、trah を一般的な“子孫”という意味で用いるだけでなく、共通の祖先を頂点として親族的繋がりをもつ社会組織集団を“trah”と呼んでいる。ジャワ語の正式名称には trah の前に Paguyuban (association) という言葉が付与され、“Paguyuban Trah～”という名称で呼ばれることが多い。また、西洋的教育を受けた priyayi (官吏)の間ではインドネシア語が好んで用いられ、“Ikatan Keluarga～” (～一族同盟)、“Persatuan Keluarga～” (～一族連合)、“Keluarga～” (～一族)といったインドネシア語の名称が用いられる。また、イスラム系の親族組織においては、“Bani～”という名称が多く、この bani はアラビア語で“息子たち、子供たち”を意味する [ibid.: 4-5]。

Trah の発生

Trah は独立後になって新しくできた組織ではなく、オランダ植民地時代から存在していた。ヨグヤカルタでは1912年に、Harya Soeryawinata 王子の子孫により、スラカルタでは1937年に、Jipang の王子の子孫により、trah が設立されている [Sjafri 1980: 3, 42]。このように当初は trah は、ジャワ王国の王族たちの公的親族組織を指すものであった。しかし、すべての王族が代々 trah を組織したのではなく、独立後に組織化されたものもある。このような王族の間の組織が、独立後に priyayi によって模倣されるようになった (独立前に設立された場合もある)⁵⁾ また、santri (熱心なイスラム教徒)の間でもこのような組織化が独立後に多く行われた。1965年以降には民間人の間でも trah の組織化が盛んになった。Trah の発生過程について Sjafri は、trah の中心となる祖先が、どの社

5) Tegal の県知事 (bupati) の子供の子孫たちは、1938年に trah を設立している [Sjafri 1980: 3]。

会階層に属するかによって“ndara (王族) trah”, “priyayi trah”, “santri trah”, “wong cilik (一般人) trah”の四つに分類し、その設立時期を表1のように示している。データが不十分なため、これだけでは設立年代の流れについてははっきりしたことはいえないが、民間人の間で trah の組織化が行われ始めたのは最近のことであり、王族の慣習が、ndara→priyayi→santri→wong cilik という流れで模倣されていった過程が窺える。

表1

設立年代	trah のタイプ				合計
	nobility	priyayi	santri	wong cilik	
-1945	2	4	1	—	7
1946-1955	1	—	2	—	3
1956-1965	—	—	1	2	3
1966-1979	—	5	2	3	10
年代不明	11	10	3	—	24
合 計	14	19	9	5	47

Sjafri [1982: 35]

Trah 設立の過程

Sjafri によれば、trah が成立するには(1)適切な祖先の存在、(2)成員間の共通の目的、利害の形成、(3)熱心な設立者の存在という三つの条件が必要であるという[Sjafri 1982: 35]。頂点に掲げる祖先の選択については、できるだけ著名な祖先を選びたいという願望と、成員の優越性を保持するため、成員数をできるだけ限定したいという願望との間にジレンマが生ずる。というのは世代の離れた著名な祖先を選べば選ぶほど、必然的にその親族的広がりが大きくなり、成員数が増えてしまい、選ばれた者という稀少価値が下がるからである。民間人の trah に関しては、大抵の場合、祖先がせいぜい3-4世代上に過ぎないので、

このような問題はないという [ibid.: 36-37]。

目的に関しては、一般的にほとんどの trah が親族的絆を維持し、成員間で相互扶助することを目的としている。ジャワ語の“ngumpu-lake balung pisah” (バラバラに分かれた骨を集める) という表現が示すように、親族的繋がりを大切にすることはジャワ人にとって重要であるといえる。設立者はほとんどの場合、社会的地位が高く、富裕な者がリーダーとなって委員会を作り、組織化を進める [ibid.: 37-38]。

Trah の成員

Trah の成員権については、明文化された規約をもつ trah を除いては明確に意識されていない。原則的には、ある祖先を頂点として、その系図に記載される親族はすべて trah に登録され、自動的に正成員として認められる。しかし、その trah に参加するか否かは個人の自由意思に委ねられ、自分の属する trah の存在についてすら本人が全く知らない場合もある [ibid.: 39]。

成員には特定祖先のすべての子孫とその配偶者が含まれ、配偶者は離婚もしくは再婚をしない限り、寡夫または寡婦になった場合でも成員権を失うことはない。⁶⁾ 成員権の失効は本人の死、辞退、委員会の罰則による剥奪により起こりうる [ibid.: 46]。

年齢的には18歳以上の成人は未婚・既婚を問わず正成員とするが、18歳未満でも既婚の場合は成人と認め、正成員権を有すると定めている trah もある。養子についても、一部の trah では正成員とするところもあるが、義理

6) Sjafri の調査した Bani Abdul Djabbar の1978年の会合のスピーチで、Kyai Haji Abdul Djabbar の直接の子孫の配偶者が、自分は anggota cangkakan (擬成員) であるとの発言をしたところ、委員会のメンバーがあとでそれを訂正し、配偶者も同様に正成員であることを説明したという。

の子供に関しては、祖先との直接の血の繋がりが存在しないということから、成員と認められないことが多いという [ibid.: 42-43]。

明文化された規約をもつ trah においては、成員を (1) anggota biasa (普通成員), (2) anggota luar biasa (特別成員), (3) anggota kehormatan (名誉成員) の三つに分けることがある。たとえば Sjafri のあげた Paguyuban Trah Hamengkubuwana I (ヨグヤカルタ王朝の創始者の子孫からなる trah) においては、(1)として Hamengkubuwana I のすべての子孫とその配偶者(寡夫・寡婦を含む), (2)として王族ないしイスラムの聖人(wali)の子孫, (3)として組織に貢献し、委員会が名誉成員として認めた者らを含んでいる。(1)の成員については、投票権、被選挙権などを有するが、(2), (3)の成員は、会合に参加し意見を述べる権利はあるが、投票権はない [ibid.: 46]。この成員の三つのタイプについては、trah の規約に明記はされているが、実際の組織の中でこのような区別がなされているか否かは定かではない。⁷⁾ 明文化された規約をもつ trah でさえ、例外的であり、多くの trah では成員資格の区別はおろか、成員権に関する規定すらないと考えられる。

組織構造

Trah の中には、近代的組織形態を有するものもある。頂点に立つ運営委員会は、富裕な設立者を中心とした trah の最重要メンバーからなっている。Trah には少なくとも trah の長、書記、会計がおかれている。組織が大きく、成員がいくつかの地方に拡散している場合は、地方にその下部組織がおかれることもある。Trah の運営費については、一応 trah の各成員から会費が徴収されることにはなっ

ているが、大抵の場合これは徹底せず、一部の裕福な成員の寄付によって賄われていることが多いという [ibid.: 55]。

シンボル

大規模な trah においては、固有のシンボルをもっている組織もある。このシンボルには、その trah のもつ社会的背景や目的などをデザインしたものが多い。

活動

どの trah にも共通している活動としてあげられるのは、断食明けに催される halal bi halal または syawalan⁸⁾ と呼ばれる年1回の会合である。そのほかに、trah によっては祖先の墓参を行ったり、月例会合を開き、その中で arisan⁹⁾ やさまざまな講演などを行ったりするところもある。出版物(bulletin)の発行を行なっている trah もあるが、大規模な組織に限られる。これらの会合においては、個々人の職業、経済状況、教育などが話題になり、会合が、就職口を捜したり、入試のコネを求めたりする一つの機会を提供する場となっている [ibid.: 60]。

8) Halal bi halal は「互いに挨拶し合う」という意味である。語源はアラビア語で halalは「(法によって) 定められた」という意味である [Pigeaud 1938: 148]。断食明けの月(Sawal 月もしくは Syawal 月と呼ばれる)に行われる「Sawal 月の挨拶」(syawalan, sawalan)の別称でもある。

9) Arisan はジャワにおける「無尽講」である。一定額の会費(iuran)を35日(七日週と五日週の組合せによるサイクル)もしくは1カ月に1度の会合で集め、そのつど、集まった金を入札によって競り落とし、あるいは単に抽籤で少人数の会員に分配する。主として商人の間で行われる民間金融的な大規模なものから、市場の小商人たちの積立預金のような arisan, さらには親睦を目的とする少額会費の arisan まで、多様である。Trah 内の arisan は、親睦を目的とした arisan であることが多い。

7) Sjafri も実際の調査で、anggota luar biasa や anggota kehormatan の具体例を押さえているわけではない。

Trah の流行

Sjafri は、1965年以降 trah が急速に広まった理由として、次のように述べている。まず、基本的にジャワ人の伝統的価値観として *sarasilah*¹⁰⁾ を使って祖先を辿りたがるという傾向と、*rukun* (調和)、*gotong royong* (相互扶助)、*tentrem* (安寧) という概念の重視をあげている [ibid.: 83-84]。

なぜ 1965 年以降かについては、次のように説明している。独立以前には、系図を辿って社会組織を作るとは王族の間の慣習であったが、独立後は、*raden mas*, *raden ajeng* といった王の子孫のもつ称号は意味を喪失してしまった。スカルノ時代には重要視されなかったこの称号も、65年以降の新体制に入ってから、また復活し始めた。¹¹⁾ また、独立後、王族や貴族たちの地位が下降を辿ったのに対し、教育によって得た学位や社会的地位が社会的有効性をもつようになり、一般人の上層への流入という上昇傾向が現れ始めた。このような *vertical mobility* も一つの要因となり、65年以降に、貴族の称号が復活したことを契機として、王族たちは自分たちの下落した威信をもう一度復活させるために trah を再組織し、また一方で、民間人も自分たちの威信を誇示するため、宮廷の慣習であった trah の組織を模倣したというのである。

Vertical mobility とは別に、*horizontal mobility*、即ち、人々が各地方に拡散して居住するという傾向も出現した。この現象によ

り親族的繋がりをもつ者との接触機会が減少したので、それを強化し、お互いの社会的、経済的利益を高めるために trah を組織し、役立てようとしたことも、trah 流行の要因の一つである。これはスンダ人の *bondroyot* や、バタック人の親族・地縁組織 (*huta*)、ミナンカバウ人の *nagari* などが、集団を組織し、さまざまな社会的、経済的相互扶助活動を行なっているのに共通している。

また、新しい社会状況の中で、政治的な問題を回避しながらも、一つの近代的行政体系をもつ組織としての trah は、*aliran kebatinan* などと並んで、政治問題抜きの一つの社会組織集団を形成しているといえよう [ibid.: 85-87]。

以上、Sjafri の記述に基づいて trah の概観を試みた。その補足として、極めて不十分ではあるが、筆者自身の入手しえた資料に基づき、ヨグヤカルタを中心とする trah の例を参考までに文末に付した。

III Trah をめぐる解釈

Sjafri の記述と解釈からも明らかなように、trah は多面的な現象である。ここでは論点を整理して、trah についての若干の考察を加えたい。まず第1に、trah の「流行」を短期的なタイム・スパンにおける現象として捉えた場合の解釈、そして第2に、trah を長期的な文化変化の視点で捉えた場合の解釈について述べる。

(1) 短期的文化変化の視点

Trah の「流行」を 1965 年以降の、比較的短いタイム・スパンの現象として捉えた場合の解釈について検討してみよう。

Sjafri は、1965 年以降に一般人の間でも trah が組織されるようになったことを強調している。Sjafri の論点をまとめてみると、

10) Sjafri [1982: 83] において *sorosilah* と記されているが、ジャワ語における正書法では *sarasilah* であり、本稿では後者を採用した。なお、人名表記も正書法に従って書き換えている。

11) この証拠として、最近では *Bagian Silsilah* に、称号を証明するための *serat kekancigan* を求める人が、1カ月に 200-300 人にのぼっていることを指摘している [Sjafri 1982: 28]。

- 1) 独立後、禁止ないし軽視されていた称号の使用や系譜の誇示などが、1965年以降、復活した。
- 2) 教育の普及による階層の流動化が、王族・貴族層における地位低下と喪失感を招き、かつての威信の復活を望んだ。
- 3) 階層の流動化は、他方では新たな「成功者」を生み出し、彼らも威信を示すために王族をまねて trah を作った。
- 4) 水平的な移動性の増加は親族の拡散をもたらし、そのために接触の機会を増加させる必要が生じた。
- 5) 社会的、経済的利益のためのネットワーク作りが必要になった。

さらに文化的背景として、sarasilah によって祖先を辿りたがるというジャワ人の傾向、rukun, gotong royong, tentrem などの価値の存在があげられている。

Sjafri の論点は trah の流行を、主として社会的・政治的变化の関数として捉えようとするものである。しかし、なぜ 1965 年以降かということの説明する要因は 1) のみである。3) は 1) を前提としてのみ可能であり、他の点 2), 4), 5) は必ずしも 1965 年にかかわりのない、独立後連続してみられる現象である。

1965 年以降の「新体制」下における「新しい」方向性が、部分的には「復古的」であったことは事実であろう。大統領の呼称が Bung Karno (“スカルノ 兄貴”) から Pak Harto (“スハルトさん”) へ変化したことも、独立以前の権威秩序の復権を象徴的に示しているかのようである。しかし、称号復活という要因のみが trah 流行の引金たりえたかどうかは疑問である。1965 年以降という時期から考えるならば、むしろそれ以前には活発であった政治活動が、1965 年の政変を経て急速に冷却化した事実、即ち、集団もしくは組織の形態が政党から他の形態に移行せざるをえなかったという状況があったのではなかろう

か。¹²⁾ Trah によっては、規約をもち、議長、書記、会計がおかれているという事実は、政党や社会運動団体をモデルとして組織されている trah もあるという一面を示すと考えられよう。集団の非政治化という意味で、trah の「流行」は kebatinan (ジャワ神秘主義) の集団発生と、ある程度、類似した現象と捉えられるであろう。

しかし、より基本的には、果たして 1965 年以降、明らかに trah という組織が広まったかどうかという事実自体が問われてもよい。Sjafri が依拠しているのは、回収されたアンケート中の、trah の設立年代に関する回答の集計結果である (表 1 参照)。そこに示されているのは、アンケートの回答のうち、1955 年以前に設立された wong cilik の trah が皆無であるのに、1956 年以降、五つも設立されていること、そして priyayi trah が 1946–1965 年の期間に設立されたものは一つもなく、1945 年以前か 1966 年以降に設立されたものに限られるという二つの事実に過ぎない。資料の不足から、果たして 1965 年という時期が trah 増加にとって重要な意味をもつか否かは俄かには判断できない。しかし、1965 年という時期に固執せず、もう少し持続的な現象の中に含めて考えることも可能ではなかろうか。

12) たとえば、多少時代はさかのぼるが、Geertz のみた Modjokuto はそのような状況ではなかったろうか。即ち、さまざまな政治的・宗教的イデオロギーに基づく集団が、「縦」にジャワ社会を分割して、おのおのが自足的な社会であろうとする状況である [Geertz 1960]。このような「縦割り社会集団」を Geertz は aliran と呼んだが、aliran という語は、その後のジャワもしくは Modjokuto 以外の地域では、政治・社会集団を指す語としては用いられていない。むしろ、現在では kebatinan の「派」を指す語として用いる方が一般的である [Mulder 1980: xi–xiii]。この意味の変遷は、「集団」の形態の推移を示唆するものかもしれない。

(2)長期的文化変化の視点

Trah と呼ばれる組織が王族に由来することに疑問の余地はない。時代の確定はさておくとして、trah と呼ばれる組織が王族の独占物から、徐々に一般人の間にみられるようになってきたことも事実であろう。ここでは、王族に始まった組織が一般人の間に広まった文化的な背景について述べる。

Sjafri の解釈は社会学的側面に力点がおかれ、trah の広がりや文化的背景としては、ジャワ人の「系図嗜好」の傾向、そして「調和」、「相互扶助」、「安寧」という価値の存在をあげるに留まっている。このうち、「調和」などの文化的価値は、ジャワ人であれば何人たりとも否定しない、いわば文化的イデオロギーの一部である。これらは、trah の設立趣旨に対する公式的な答えの中で頻繁に言及されるものであろう。しかし、これらの価値によって trah という形の組織の発生と広がりを説明することはできない。これらはジャワ人にとってあまりに一般的かつ普遍的（ジャワにおいて）なものであり、あらゆる社会単位、集団、もしくは個人間の関係の中で重視されうるからである。これらの「標語」は組織化の結果、設定されるのであって、その原因や背景ではない。

また、系図は確かに重要な概念であるが、ジャワ人の多くは系譜関係に関心をもっていない。王族・貴族を除けば、一般のジャワ人の系譜に対する知識は、せいぜい2-3世代さかのぼるに留まり、系図という概念をもたない。系図を重要視するのは、王族もしくは貴族に限られる。それゆえ、一般人における系図への関心は、trah の広がり以前に存在していたのではない。むしろ、系図への関心の発生は、trah の広がりという現象の一部なのである。

Trah の文化的背景を探るには、現在みられる trah の諸相を分解し、その個々の要素

について検討することが必要である。即ち、trah という名称ではなく、trah の実体を構成する諸要素が、一般人の文化の中にどの程度みられるか、ということをはっきりさせる必要がある。一般人の間に trah という概念はかつて存在しなかったが、「trah らしきもの」もしくは trah の原初形態は存在していたのではないかと考えられるからである。

まず、trah を、祖先を中心に構成される集団として捉えてみよう。祖先と現在の間の時間の連続性を図表化して表現する系図は、すでに述べたように宮廷の伝統に属する。しかし、「祖先を中心とする集団」という概念自体は宮廷の伝統の独占物ではなく、また trah 以外の形態をとりうる。即ち、共通の開祖を戴く集団として、ジャワのムラは trah に比定されうる。¹³⁾ ジャワのムラは、典型的にはその土地を開いた最初の定住者 (cikal bakal もしくは cakal bakal) を「共通の祖先」として祭祀する単位である。稲の収穫後に実施されるムラの清祓儀礼 (merdi desa もしくは bersih desa)¹⁴⁾ は、開祖を祀る儀礼である。また、ムラ内の各世帯が主催する kenduri 儀礼¹⁵⁾ においては、開祖の霊に対して呼びか

13) 「ムラ」という語を用いるのは、「村落」という語がジャワ研究においては「自然村」、「行政村」両方の意味で混用されているためである。ここでいう「ムラ」は「自然村」である。なお、地域によって、「自然村」が「行政村」化された場合もあれば、「自然村」にかかわりなく「行政村」が設定された場合もある。また、集落が「自然村」自体である場合もあれば、「自然村」がいくつかの集落に分かれている場合もある (宮崎[1984] 参照)。

14) 現在ではまれにしか行われていない (宮崎[1984] 参照)。

15) さまざまな通過儀礼 (出産、結婚、死者儀礼など)、年中行事 (イスラム暦の祭日)、状況儀礼 (安全祈願など) において催される儀礼的な料理の分配である。Geertz [1960] は slametan で総称しているが、ヨグヤカルタ地方では kenduri ないし kenduren を総称とし

けがなされ、供物が捧げられる。ムラの現在の住民と開祖との系譜的關係は、実際には明らかでなく、住民の中には他地方からの転入者も含まれている。しかし、後述するように、syawalanに際してムラ内の「長老」を訪れることを考え合わせるならば、ある意味ではムラ自体を一つの擬制的な親族集団、擬似trahと解することも不可能ではない。

次に、trahの主たる活動であるhalal bi halalについてみよう。

Halal bi halalは、現在ではtrah以外にも、企業、役所、学校などの組織においてみられるが、その原型はsyawalanである。¹⁶⁾ 断食明けのSyawal月(ないしSawal月)早々に行われることに由来するsyawalanは、年長者への挨拶回りである。¹⁷⁾ 下位世代に属する者は上位世代に、年齢の下のは上の者に、日ごろの非礼や無沙汰を詫び、赦しと祝福を乞う。この「上」と「下」は主として親族・姻族のコンテクストに基づくが、それ以外にも、たとえば村内の「長老」、「有力者」に対しても、その人々を「年長」に見立てて、同様な挨拶回りがなされる。¹⁸⁾

しかし、交通手段の発達が活動範囲の拡大を促し、syawalanのために移動する範囲が拡大することにより、ほぼ家族単位で動き回るsyawalanでは、互いにすれ違いの可能性も生じている。たとえば、筆者の参加したsyawalan(1981年)では、スラカルタ近郊のNguterの住民の場合、Wonogiri、その近郊農村数カ村、さらにPonorogoまで訪れ、ほ

ぼ8時間を費やした。翌年のlebaranにおいては、ヨグヤカルタ特別区スレマン県M郡の農村の一家のsyawalanに同行したが、この時には、Salatiga市内および近郊7-8村を回り、往復12時間以上の行程であった。特に前者の例においては、すれ違いの危険を予想して、夕刻に出発したにもかかわらず、Ponorogoでは何人かの縁者に会うことができなかった。このようなすれ違いを避けるために、時間と場所を定めてhalal bi halalを行うようになったとする意見も、ジャワ人の間から聞かれた。¹⁹⁾

Halal bi halalはGeertzによれば、都市priyayiによって始められた一種の儀礼の簡素化である[Geertz 1960: 380]。Syawalanにおいては、別の訪問者が互いに顔を合わせるのは単なる偶然であって、彼らの間に「集団」という意識は希薄である。しかし、halal bi halalにおける参加者は、一同に会することになるので、排他性を有する「集団」という色合いが強くなる。

この点を除けば、個別的なsyawalanから集合的なhalal bi halalへの距離は、それほど遠いものではない。Trahの実質的な活動がhalal bi halalであるとすれば、²⁰⁾すでにsyawalanの中にtrahの萌芽がみられることになる。

て使う傾向にある(宮崎[1984]参照)。

16) Jayによればmegengan[Jay 1969: 179]と呼ばれる。

17) Koentjaraningratによれば、「核家族」以外の縁者(relatives)に対する義務といえるのは、年長の親族へのlebaran時の訪問のみである[Koentjaraningrat 1957: 91]。

18) ジャワにおける「差異」は、年齢差もしくは世代差におき換えて表現されることが多い。

19) このような意見は、ヨグヤカルタ市内のkampungの住人や、大学関係の知識人から聞かれた。

20) Arisan(無尽講)もtrahの活動に含まれるが、arisanはジャワ社会において、人(特に女性)が集まるための一種の「口実」として重要な習慣であり、あらゆるネットワークを使ってarisanは組織されうる。およそ儀礼以外のあらゆる集会(少人数)にはarisanが付随するといっても過言ではない。それゆえ、arisanはtrahという集団を維持する要因ではありえても、それを発生させる要因にはなりえない。

(3)考察

このように、現在みられる trah の諸相を分解し、その個々の要素について検討してみるならば、trah という語や概念は存在しなくとも、すでにその個々の要素らしきものは、一般人の文化の中にも見出だすことが可能である。Trah の基礎をなす「祖先」の概念や、trah の主たる活動である halal bi halal は、trah が形成されていない社会領域にも、その原初的な形態が見出される。たとえ trah という名称で組織されていなくとも、その実体は、一般人の文化の中にすでに存在している。一般人の文化にとって trah が必ずしも異質的なものではないことは、trah の広がり の基盤を保証するものである。あとは、実体としての個々の要素を集めて、その実体に trah という名称を与えることだけが残されているといってもよいであろう。

Trah という名称ではないが、内容的に trah に近い親族集団は、まれにではあるが農村部に存在する。Koentjaraningrat の報告する alur waris は、内容的にみて、ほぼ trah そのものであるといってもよいであろう。Alur waris は、ある祖先から ambilineal (折一的) な系を辿る子孫からなる集団で、その主たる活動は祖先祭祀である [Koentjaraningrat 1967: 262-263]。²¹⁾

Alur waris をみる限り、農村地域において、実体としての trah が発生する条件は整っているように思われる。それでは、なぜ trah という名称、形式が浸透しつつあるのか、という疑問が湧き出よう。これについては、時期の区切り方はさておき、Sjafri のあげる社会学的な要因を部分的な解答として与えることは可能である。しかし、より大きなタイ

ム・スパンに注目するならば、trah の広がり は、宮廷という文化的中心のもつ遠心力の作用の一部であると考えられる。Trah という名称と形式の採用は、言語や儀式のスタイル同様、²²⁾ 文化の範型としての宮廷の習慣の模倣である。ジャワにおける宮廷が、範型として模倣されるべき「中心」としての性格をもつことは、Bali と同様である。²³⁾ この「中心性」はジャワの王権に不可欠な要素であり、それゆえ、かつての「統治する側」の論理であった。しかし、trah の広がり は、この論理が、かつての「統治される側」にとって、今なお効力を保っていることを示すものと考えられる。²⁴⁾

「中心」のもつ文化的影響力は、実質的に trah に近い集合体に trah という形式を与えるばかりでなく、trah とは異なった型の集団が trah と称されるという現象をも引き起こしている。

Sjafri が一般人 (wong cilik) の trah の例としてあげる、一介の屋台から ayam goreng (鶏肉の唐揚げ) で財をなした mbok Berek の trah と、かつての bekel (采邑制下の村差配) の子孫からなる trah は、王族の trah とは異なった性格をもっている。これらの trah は遠い祖先に由来するものではなく、僅か1-2世代以前の人物の子孫から構成されている。Sjafri のあげた trah 成立の条件の一つは「適切な祖先の存在」であるが、これら一般人の trah の例は、「祖先」と呼ぶにはまだ世代深度の浅い人物を中心としている。しかし、彼らは何らかの意味で特別視されうる人物であるので、少なくとも「適切」ではあり

21) 彼の調査した Tjelapar 村には在村貴族 (kentol) が存在するので、alur waris はこれらの在村貴族の trah といえるかもしれない。

22) たとえば、結婚式における花婿、花嫁の衣裳や飾りつけには宮廷のスタイルが多用されている。

23) Geertz [1980] 参照。

24) 「占い」の知識をめぐるても、trah と同様の方向性がみられる。宮崎 [1983] 参照。

うる。Mbok Berek は「成功者」であるし、かつての bekel は少なくとも農村においては、社会的、経済的な上層に属する「有力者」である。このような「成功者」や「有力者」を中心に、その近親者が集団ないし閥をなす傾向は、ジャワにおいてもごくふつうにみられる。²⁵⁾ この個人中心的な近親者の集合体 (personal kindred) は、単系出自の原理が強く働く社会でも存在しうが、ジャワのような非単系的な社会においては、重要な役割を担いうる。

Personal kindred は世代が進行するにつれて、再編されていく場合が多く、この点で特定祖先を戴いて世代的連続体を構成する出自 (系譜) 集団とは性格を異にしている。Mbok Berek や bekel の “trah” は、成立からみるならば、personal kindred であり、典型的な trah ではない。それらの “trah” が超世代的な集団に変身するか否かは、今後数世代の経過を待たなければならない。

IV お わ り に

ジャワにおける trah の広がりについて、ここでは、主としてその文化的側面からさまざまな解釈を試みてきた。その中で、最も強調すべきは、文化の範型としての宮廷文化の性格であろう。その範型の模倣を軸に、さまざまな社会的・政治的要因が相互作用し合って、trah の広がりを生み出したとみることができよう。その要因の中には、社会範囲 (行動範囲、通婚圏) の拡大、ある意味での「中流化」(差異化志向) をみてとることがで

きる。Trah が農村部においても存在することは、宮廷から発する「文化の流れ」²⁶⁾ が農村部まで浸透しつつあることを示している。かつ、この流れもまた、王都周辺地域の都市化現象の一つであろう。

もとより、本論は不十分な資料に依拠しながら、trah という現象についての可能な解釈を提示したにすぎない。Trah が現在、進行中の現象であることから、今後、長期にわたって、その広がりもしくは縮まりについて、観察を続ける必要がある。

[参考資料]

以下の資料は、筆者のヨグヤカルタ滞在中、ガジャ・マダ大学文学部学生 R. M. Jarot の協力によって得たものである。もとより本格的な調査ではなく、あくまで予備的な性格の調査資料であることを断っておく。

Trah Kanjeng Pangeran Harya Soeryawinata は、その名の示す通り、KPH Soeryawinata を祖先として戴く trah で、1900年代にその子孫たちによって設立された。当時は Paguyuban Trah Soeryawinatan と呼ばれた。KPH Soeryawinata はスルタン Hamengkubuwana II の孫で、Kanjeng Panembahan Amangkurat Anyakra Kusuma の子である。KPH Soeryawinata には正室と側室がひとりあった。彼は、ディポネゴロ戦争のころ、即ち 1825-1830 年に Desa Karang Gayam (スレマンの南、Nggampigan の西方の村) で正室を迎えた。この正室はヨグヤカルタの Pangeran Dipawiyana の娘であった (Dipawiyana は Panembahan Amangkurat

25) ごく些細な例をあげれば、比較的貧しい層に属するある男が工場に職を得、かつ社宅に入る権利を得ることによって、彼および妻の親兄弟がその社宅に転がり込み、拡大家族が形成されるということは、決してまれなことではない。彼は「成功者」なのである。

26) ジャワの知識人、とりわけ宮廷文化に近い人々にみられる考え方である。宮廷が文化の中心であり、すべての文化 (kabudayan) は、水が高いところから低いところに流れる (mili) ように、中心から周縁に広がっていく、というものである (宮崎 [1983] 参照)。

の腹違いの兄で、側室の子であった)。

1900年代に設立された Paguyuban Trah Soeryawinatan は、1956年に RT Soeryawinata, KRT Wiranegara, RW Admawijaya により再興され、組織化された。RT Soeryawinata は、KRT Natayuda の正室の子であり、KRT Natayuda 自身は、KPH Soeryawinata の正室の7番目の息子である。この trah の存在する地域は、この KRT Natayuda の所領であるので Natayudan と呼ばれる。

Trah KPH Soeryawinata は、組織の中心がヨグヤカルタにあり、そのほか、ジャカルタなど6都市に支部 (brayat) が存在する。ヨグヤカルタの組織には、議長 (ketua) 1名、副議長 (wakil ketua) 1名、書記 (secretaris) 2名、会計 (bendahara) 1名、監査役 (Pengayom) 3名、相談役 (penasehat) 2名がおかれている。これらの委員には未婚者が多い。ジャカルタの支部には議長、書記、会計がおおの1名ずつおかれている。

Trah KPH Soeryawinata の現在の会員数は約1,000人にのぼるが、そのうちの400人近くはヨグヤカルタないしはその周辺に居住している。ヨグヤカルタ周辺に居住する400人のうち60%が Natayudan の住民である。なお、Natayudan は、KPH Soeryawinata の子である KRT Natayuda に下賜された所領であり、現在、650世帯 (3,185人) が居住している。

この trah が設立された1900年代の主たる活動は“pralenan”であった。Pralenan とは各成員から当時ひとりあたり10ルピアずつの会費を徴収し、これを trah の成員が死亡した場合の香典、もしくは葬儀費用として用いた互助活動のことである。

現在における主たる活動は、halal bi halal の会合と arisan である。

Halal bi halal は断食明けに行われる会合で、これには多くのメンバーが集まる。会合

前の準備として、委員会は世帯ごとに招待状を出すとともに、各成員からひとり300ルピアの寄付金 (sembangan) をつくる。集会場については、委員会が Puasa 月に会合をもち、成員の住居で十分な場所を提供できるところ、もしくは交通の便のよい会館 (gedung pertemuan) を選び、それを借りることを決定する。Trah KPH Soeryawinata の halal bi halal の会合は以前は Natayudan の KRT Natayuda の住居で行われたこともあったが、1982年には、Sasana Hinggil (王宮の南広場の講堂) で開催された。

もう一つの主たる活動である arisan は、一種の無尽講で、毎月7日にメンバーの女性成員 (ibu-ibu) によって行われている。ヨグヤカルタに住むメンバーの10%前後 (40人程度) が参加している。これらのメンバーのほとんどが Natayudan の住民である。会合場所は、arisan の各メンバーの家を順にめぐり、毎月異なる場所で行われる。Iuran 1回につき400ルピアであるが、おのおのの経済状態によって、それに500ルピアを付加することもできる。

Natayudan という地域自体は、ジャワ文化の伝統を維持しようという機運の高い地域で、たとえば、ガムラン、舞踊、hangen mandra wanara ——ワヤン・ウォンに似た舞踏劇で、ラーマ・ヤナなどの演目があるが、謡 (nembang) のみを音楽として用いる——などの練習が盛んに行われている (なお、hangen mandra wanara は1975年ごろに再興されたが、現在では再び途絶えている)。従って、trah の再興以後はこの trah においても、創立記念日や lustrum (5年ごとの記念式典) を祝い、活動も活発であったが、1983年2月現在では、主たる活動者である青年層が学業や仕事に忙しく、これらの活動は休眠状態にある。

参 考 文 献

- Geertz, C. 1960. *The Religion of Java*. New York: The Free Press.
- . 1980. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton: Princeton University Press.
- Horne, E. C. 1974. *Javanese-English Dictionary*. New Haven ; London: Yale University Press.
- Jay, R. 1969. *Javanese Villagers: Social Relations in Rural Modjokuto*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Koentjaraningrat. 1957. *A Preliminary Description of the Javanese Kinship System*. New Haven: Yale University Press.
- . 1967. Tjelapar: A Village in South Central Java. In *Villages in Indonesia*, edited by Koentjaraningrat, pp. 244-280. Ithaca: Cornell University Press.
- 宮崎恒二. 1983. 「ジャワにおける占いと社会変化——文化の連続と断絶」『民族学研究』48-2: 129-145.
- . 1984. 「ジャワのムラ社会について」『社会人類学年報』10: 153-170. 東京: 弘文堂.
- Mulder, N. 1980. *Mysticism & Everyday Life in Contemporary Java: Cultural Persistence and Change*. Singapore: Singapore University Press.
- Pigeaud, Th. 1938. *Javaans-Nederlands Handwoordenboek*. Groningen: Wolters-Noordhoff.
- Sairin, Sjafri. 1980. *Javanese Trah: A Preliminary Description of a Type of a Javanese Social Organization*. M. A. Thesis of the Australian National University.
- . 1982. *Javanese Trah: Kin-Based Social Organization*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.